

書評 岩崎誠、坂志朗、藤間剛、林隆久、松村順司、村田功二 編

早生樹 -産業植林とその利用- 259 ページ

出版社：海青社

ISBN978-4-86099-267-5

定価本体 3,400 円＋税

発売日：2012/ 7/ 30

本書のタイトルである「早生樹 -産業植林とその利用-」は、いわば人類の長年の課題のように思われる。人類の活動の拡大、経済の発達とともに、開発途上国の森林は、農地に、そして農地から工業用地・宅地へと移行し、減少の一途をたどっている。評者は、東南アジア地域で生産される木材、また日本に輸入される木材の樹種について調べているが、本書を目にしたとき、やっとこんな本が出たのかと喜びを禁じ得なかった。

本書の各章を要約すると以下の通りである。

第1章「早生樹産業植林の概要-規模と生産力の視点から-」：早成樹造林の一般的な説明と、現代の問題、今後の課題、産業植林開発のための指標。

第2章「産業植林と環境」：特に土壌の面から、産業植林開発・木材生産のために考慮しなければならない留意事項。

第3章「材質」：これまでに熱帯地域で多く植林されてきたアカシア類、ユーカリ類、マツ類等に加え、国産のセンダンとチャンチンモドキについて、育種、成長、材質、利用などの解説。

第4章「遺伝子組換え技術」：遺伝子組換え技術の基本的な説明、その樹木への応用例と早成樹への応用。

第5章「パルプ利用」：アカシア類、ユーカリ類のパルプ利用の現状、樹種ごとの繊維の特性、問題点、改良点、含まれている化学成分の特徴など。

第6章「エネルギー利用」：バイオマス発電、木質ペレット、バイオエタノール、バイオディーゼルについて、原料、仕組み、現状と今後の課題。

第7章「用材利用」：第3章で取り上げられているアカシア、ユーカリといった早生樹の利用に加え、中国の早生樹資源とその利用、日本企業の取り組み。

本書は内容が多岐にわたっており、また情報量も多く、評者の専門外の分野に関しては完全に理解できたか不安であるが、どのような研究分野の方でも、理解できる分野は必ずあるので、本書を早成樹材入門のオリエンテーションと

していただきたい。

ただ、欲を言うと、著者が19名と多いことからか、特に樹種名の呼称や表示方法が微妙に異なったりしている点が気になった。また、章と章のつながりについて、特に第3章と第7章は本書でも核となる部分であると思われるが、両章で記述の繰り返しが多かったり、矛盾ではないかと思われる記述も散見された。本書全体を通してもう少し著者ごとの連携があった方がよかったのではないだろうか。内容、情報が充実しているだけに惜しい気がする。

芽生え始めた早生樹造林・材利用の芽が摘まれないように、そして農地や工業用地などに転用されないように、大きく育ってほしいものである。本書が、その芽を育てていくための手引きとして活用されることを大いに期待したい。

安部久（(独) 森林総合研究所 木材特性研究領域）評